

# 昭和旧制度期における「女子体育は女子の手で」に関する研究

掛 水 通 子

## はじめに

本研究者は前報<sup>1)</sup>で、大正初期までについての「女子体育は女子指導者の手で」の出現について報告した。女学校の女子体育教師の出現は、中等学校女教師の存在意義の上であり、さらにその前には小学校女教師の活躍があった。中等教育は男女別学がとられ、女教師の教える相手は女生徒に限定され、女子に適した教科を教えるには女教師が良いという学科面と女子は女子と通じ合え、女教師は女学生の生きた模範となるという生活、徳育面から女学校には女教師が必要とされた。明治20年代末から高まってきた「女子体育は女子指導者によるべき」であるという論点は、女子の「特性」を考慮した体育を、女子自身を知っており、女子体育を学んだ女教師が教えるようというものであったが、大正初期までにはまだ、それは定着していなかった。

本稿では、昭和旧制度期<sup>2)</sup>において、「女子体育は女子の手で」はどのように論じられ、それは定着したのかどうか、定着あるいは定着しなかった理由について、諸体育雑誌の論点を中心として当時女子体育教師であった私立東京女子体操音楽学校卒業生<sup>3)</sup>に対する調査結果を加えて考察することを目的とする。

## 1. 「女子体育は女子の手で」の動向

文部大臣から体育運動審議会に諮問された「体育運動の合理的振興方法如何」は昭和5年7月8日に5方針10要項で答申された<sup>4)</sup>。方針4に「一、女子の健康を増進し且次代国民の体位を優良ならしむる為特

に女子体育の振興を図ること」とあり、要項6の女子体育に関する事項の最後に「女子の体育運動は女子の指導者に依るを適當とするを以て女子指導者養成を一層十分ならしむること」と示された。

そして、昭和旧制度期全般を通じて「女子体育は女子指導者による」ことが適當、あるいは理想であると述べられていく。

さらに、新制度に移行しても、昭和22年の学校体育指導要綱の指導方針中、計画と指導11で「中学校以上の女子の指導にはなるべく女子があたるようにする。」と示されることになる。

## 2. 「女子体育は女子の手で」の理由

「女子体育は女子の手で」の理由は様々であり、それらは幾つかにまとめられる。それぞれの主要論点を考察する。

### (1) 女子は女子自身を、女子の心身を知っているから

女子は女子自身を、女子の身体、精神、月経のことを理解しているから女子が教える方が良いという従来からの考え方である。男性側からも女性側からも同様の意見が出された。

男性側からみると、昭和2年に上田は、「女性の心持ちも肉体も最も知り尽くしているものは女性であって、女子体育を最も真面目に研究しなければならないものは亦女性だと思います<sup>5)</sup>」と述べている。同様に、東京府立第六高女教諭の古屋は女学校の体育教師として、取扱い上苦心していることや障害などを昭和4年に述べているが、月経期の見学の取扱いが

最も困難を感じることの一つとしている。「異性であることで、一見してお察しと云うことが出来ない。(中略)これが同性であれば、教師の第六観によって、その程度に応じ教育的取扱をすることが出来るので、この点から見て、女子の指導は女子でなければ徹底出来ないと思われる。」<sup>6)</sup>と述べている。昭和6年には雑誌巻頭言で「真の男性を知るものは男子自身であり、真の女性を知るものは女性以外に有り得ない。」<sup>7)</sup>と言われ、昭和10年に浅井は「女子は男子の教師に叱られてその原因の領けぬ場合が多くあるそうだが、其処に雌雄の別が存する。男子指導者は真に女性を理解せざる限り」<sup>8)</sup>と述べている。

女性からみても同様で、昭和9年に伊澤は、「女子を真に理解するものは女子である。故に女子を教育するものは女子であり度い。殊に体育に於て其の感を深くするものである。男女体質の相違はいうまでもなく、其の内臓の働きの著しい差異から見ても女子の運動は男子と同じであるべき筈がない。(中略)私は女子の体育は女子の手によって成さるべき大なる使命であることを確信し主張するものである。」<sup>9)</sup>と述べている。

## (2) 女性らしい動きは女性によって指導されなければならない

女性には女性の本質から女性にふさわしい、独自の体育があり、それを教えるためには女性らしく動くことができる女子がよいという考えである。

上田は昭和2年に「女性に最も相応しいダンスにしる女性美の表現を最も良く表はし得るものは女性に限られているのです。」<sup>10)</sup>と述べている。大谷は昭和9年に、欧米では女子体育は行進遊戯だけでなく体操や遊戯、競技も専ら女子の手で動かされ「どこへ行っても、女子らしい、曲線美の豊かな体育の指導が行はれている」<sup>11)</sup>ことを紹介し、「体操や遊戯の実行中に表現されるこの女らしさ、しなやかさの生成は、女流指導者にのみ期待し得るところのものである。されば、この事実は、当然、原則的には、女子の体育は、女子に依って指導されなければならないと云うことになる。」<sup>11)</sup>と述べている。

ここで注意しなければならないことは、女子が教

えなければならないのは、決して行進遊戯、ダンスのみではなく、体操、遊戯、競技全体の動きの中で女性らしい動きを女性が教えなければならないということである。

## (3) 女性は男性の運動の真似はできない

先に述べた(1)、(2)と関連しており、女性は女性の能力を知らない男性の運動を真似することはできないというものである。

藤村は昭和7年に、従来、器械体操は男性教師が多く教授し、その運動が「男性的運動方法に陥った為に、程度が高すぎたり、運動が強すぎたりなどして、女子の身体上好もしくない感じや結果」<sup>12)</sup>を生じ、女性は男性のようにできないのが自然であり誤って男性的の動作をすれば必ず胸腹部に変化を及ぼし病気に陥るとし、「諸外国に於ける女子の体操教授が、女教師に限られて居る理由は茲にあるのである。」<sup>12)</sup>と述べている。さらに翌年、男性教師は体質、気質が異なるから、「如何に熟練したる教師と言へども女子の模範となる事は困難である。これを要するに男子の運動を模倣する事は危険であると云ふ事を断定する事が出来る。」<sup>13)</sup>としている。

浅川は昭和11年に米国オハイオ州の「女子体育の問題に関して女子指導者の最も優れた意見を集めた」というGirls Athletics. A Series of Questions and Answersを紹介した。その中の、女子チームは男子の指導者に依ってコーチされてもよいかとの質問の答は、否であった。その理由は、男子は女子の限界を認めず、健康上、身体上の問題を論議する事ができず、「男子は男女の間に存在する相異なる標準を誤る場合がある。」<sup>14)</sup>というものであり、これが女子指導者によるべき理由であった。

## (4) 男性教師は熱意がない

昭和14年に府立一女の男子教師の松尾は、女子の教育にはもっと立派な教育者が当たらなければならないと、相手が女子でも、教育的に強い判定を下すべき場合は判然と下さなければならないとし、「一般に女子の教育者、殊に男教員はどうもいい加減な教育をして、真剣に立派な女性を作り上げてやろうとい

ふ熱意が足りないように思ひます。<sup>15)</sup>」と述べている。

### 3. 「女子体育は女子の手で」は定着していたのか

#### (1) 永田の報告

昭和12年6月から13年3月の間に全国の中等諸学校の体操科教員を調査した、体育研究所の永田の一連の膨大な報告<sup>16)</sup>は貴重な史料である。この調査によると明治42年から昭和11年までの28年間に女子で体操科教員免許状を取得したのは官立学校2859人、試験検定59人、無試験検定1290人の計4208人でこの調査時に体操科教員をしていたのは官立学校100人、試験検定14人、無試験検定617人の計731人であった。免許状所持者の内、体操科教員をしている者の割合は官立学校3.50%、試験検定23.73%、無試験検定47.83%で全体では17.37%である。官立学校で養成された「体操科教員としての多数の有資格者は、女子師範学校、高等女学校、実科高等女学校に勤務するとしても、多くは体操科教員とならざるものなることが想察せられるのである。」と述べているのである。官立がこのような状態の中で、調査当時の女子体育教員の84.40%を占めていたのは、約半数は教員に留まっていた私学4校の卒業生ということになる。

女子中等学校一校平均の体育教師は1.79人で女子体育教師は0.73人にすぎない。「女子体育は女子の手で」は定着していなかったといえる。

#### (2) 私立東京女子体操音楽学校卒業生への調査

私立東京女子体操音楽学校卒業生に記憶の範囲で勤務校の全体育教師数と女子体育教師数を尋ねたところ、どの年代も最も多く回答があったのは全体育教師2人、女子体育教師1人であった。年代別にみて平均では、全体育教師数と女子体育教師数はそれぞれ、昭和1年から10年では2.28人と1.31人、11年から15年では2.97人と1.31人、16年から21年では2.68人と1.46人であった。本人が女子体育教師として赴任している学校であるので女子体育教師が1人以上いるのは当然のことであり永田の報告よりその数は多い。しかし、女生徒の体育全てを女子体育教

師が教えること、即ち女学校の体育教師が全員女子となった状態を「女子体育は女子の手で」の定着としたとき、女学校の体育教師の一部が女子となっても、「女子体育は女子の手で」は定着したとは言えない。

### 4. 「女子体育は女子の手で」が定着しなかった理由

女子体育の指導は女子指導者によるべきといわれていても、実際はそうになっていなかった。その原因についての様々な論点を探ってみたい。これらは独立しているのではなく、全ての原因が関連し合っている。

#### (1) 女子体育教師が行進遊戯(ダンス)ばかり教えているから

先に述べたように女性らしい動きを女子が教えるという事は、行進遊戯に限定するものではなかった。しかし、女教師数の少なさと関連し合って、女子体育教師は行進遊戯ばかり教えなければならない状況に陥る事になった。そして、いつしか行進遊戯を教える事に安住したり、生きがいを感じてしまった事が女子体育教師即行進遊戯(ダンス)教師の図式を作り上げる事になった。しかし、その図式で良いとされていたのではなかった。それでは、時間割編成が困難になる、男子教師が行進遊戯を受け持たない、女子教師が行進遊戯以外を受け持たないなどの問題点が生じ、批判されて行くのである。

昭和9年に伊澤は、女子に適した運動は体操と体育ダンスであるとし、女子中等学校で一校に四人の体操教師があっても体育ダンスを教える事ができるのは一人か多くても二人で体育ダンスは「殊に女子の仕事の様に考えられて居る。それが為に時間割の配当も体操一時間、ダンス一時間、競技一時間という風に至極不便な配当になる訳だ<sup>17)</sup>」から一時間の中に必ず体操を入れ、女子がダンスのみを持つ事をなくすと共に、男子もダンスを指導するようにと述べている。ダンスばかり持つと指導者の身体に物足りなく思う個所ができ、時間配当に無理が生じるので喜

ばしいことではないとしている。

昭和9年に大谷も同様に、「多数の女性体育家は学校体育中、ただ僅かに行進遊戯という猫額大の小天地を耕しているに過ぎない現状である。女流体育家は、何故もっと体操を受け持たないのか？遊戯競技を指導しないのであるか？」<sup>18)</sup>と批判し、指導者が二、三人いる女子中等学校は少なくとも一人は必ず女子で「然かも、どこでも申合わせたやうに男子は体操を受持ち女子は行進遊戯を分担している。随って、体操及び遊戯競技を担当する指導者は、男子の方法をそのまゝ女子にやらせているに過ぎない。随って幾年経っても、女性に適応した女子体操、女子遊戯競技は生れる筈はないのである。」<sup>19)</sup>と、女子に適応した体育法はまだ無く、女子体育不振の原因はここにあると指摘している。

この状態はなかなか改善されず、昭和13年になっても大谷は「女子の先生が行進遊戯ばかり指導して、体操科の教材として最も大切な体操を女子が指導しないというやうなことも実に面白からぬ事だと思ひます。」<sup>20)</sup>と同様の事を述べ、週一回の行進遊戯では練習効果が上がらないので、男の先生の時間に復習をすることを勧め、男でも「女子の学校へ就職する以上、女子の教材を指導し得なければならぬ事は云うまでもないことであります。」<sup>21)</sup>と、述べている。

時間配当の問題は今井も同様に「体操・ダンス・競技を一時間中に適当に配列」<sup>22)</sup>するようにとの意見であった。

吉田も昭和12年に「女の先生方が体操の時間になれば、与えられた天職の如くに、行進遊戯を以て終始するのが間違っている。(中略)多くは行進遊戯の

一角に拠って、広く体育の全般に行手を広げないのである。(中略)要は、日本女子の体格をよくするのが天職なのであるから行進遊戯の枝葉末節に捉はれることに、自己の全幅の努力を捧げることなく、女子の体育は女子の手でといふ意気込で進んで貰いたいと思ふ。真の女子体育は男子には解らない。」<sup>23)</sup>と、行進遊戯だけでなく広く体育全般を教えるように述べているのである。

昭和14年度文部省教員検定中学校体操科の唯一の女子合格者となった渡邊は、「女子だからと言って、単に、唱歌行進遊戯の部面にのみ、とじこもってはならない。教授要目中の教材は、それが男子の教材であっても、一通りの認識が必要であり、『女子の体育は女子の手で。』を理想としたら、女子体育全般に渡る学問的な研究と更に、体育指導者の品格向上の上から、参考書にかじりついた。」<sup>24)</sup>と、当時の論調を理解し女子体育教師を目指したのであった。しかし、この渡邊でさえも、その後はダンスの研究者、教員養成大学保健体育科ダンス教授となっていた。

今回実施した卒業生への調査で体育教師在任中、担当の体育の授業中、ダンス(行進遊戯・唱歌遊戯)の占めた割合をそれぞれの教師生活の初期、中期、末期について尋ねた。図1は卒業年別教師生活初期の頃のダンス担当割合である。全部ダンスであった者は昭和初期が62%で最も高いが次第に減少していることがわかる。戦中、戦直後卒を除いて、8割から9割の者が半分ぐらいから全部の割合でダンスを担当していたのである。

今回の調査で、卒業生に、「女子の体育指導は女子の指導者の手によるべき」と思うかどうか尋ねた

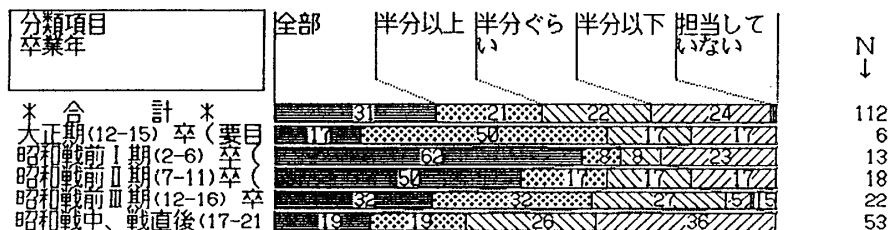


図1 体育教師初期の頃の担当授業中のダンス担当の割合  
(私立東京女子体操音楽学校卒業生への調査による)

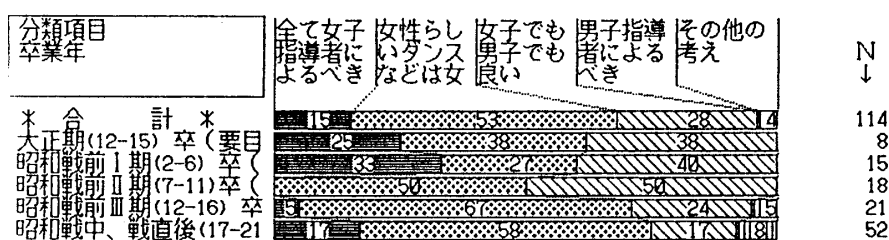


図2 女子の体育指導は女子の指導者の手によるべきか  
(私立東京女子体操音楽学校卒業生への調査による)

結果が図2である。当時思ったのではなく、女子体育教師経験を経た現在思っていることである。紙数の都合で詳細は別稿に譲るが、「全て女子指導者によるべき」は14.9%と非常に少なく、「女性らしいダンスなどは女子による」が52.6%で最も多く、「女子でも男子でも」が28.1%であった。「女子でも男子でも」の自由筆記で回答を求めた理由を読むと、「男女の特性を生かしダンスは女子が、競技は男子が」と書いている者が多い。そして、「その様にしてきて良かった」と述べている者が多いのである。

このように、女子体育教師が行進遊戯を教え、他の体操、競技等を男子が教えるということを経験した女子体育教師自身も肯定してしまい、それを打ち破ろうとした跡があまりみられないところに「女子体育は女子の手で」が定着しなかった原因があると思われる。

## (2) 指導者養成に問題がある一少ない、他科へ移る、短期養成一

昭和12年5月に女高師に体育科が設立される以前の、体育も主目的とした女子指導者養成機関は、私学4校と官立の第六臨教のみであった。どれも、短期養成であり、人数も少なく、官立と私学各一校は体操と家事を、私学一校は体操と音楽を兼ねての教員養成であった。官立は試験を要せずして教員免許状を得ることができたが、私学は無試験検定に合格しなければならなかった。これらと、僅かの試験検定合格者および人数は多いがほとんど体操科は受け持たなかった女高師の他科を専門として体操科の免許状も与えられた者が「女子体育は女子の手で」の実践者であった。<sup>25)</sup>

この指導者養成法が「女子体育は女子の手で」が定着しない原因であるというものである。

米国で、女子体育指導者が集まり、女子の直接指導には適当に訓練された女子が当たるということが決議されたことが昭和3年に紹介され、日本でもそうになれば、「これまで女子体育に関して憂慮されていた問題は、直ちに解決されることになる。ただ、現状がこれを許さないのは、よく訓練された女子指導者の少いの一事である。<sup>26)</sup>」と少ないことが問題とされている。

女子体育指導者不足は、文部大臣官房体育課の吉田が昭和6年に、「女子の運動は女子によって指導されることが理想であります。此の為には女子体育指導者を養成することが目下緊要の事であります。今日東京に、三つの養成機関がありますが、実際問題として未だ不充分なるを免れません。<sup>27)</sup>」と述べているように、文部省側も認識していた。そして、女高師体育科が設立されることになるが不足はとうてい解消できなかった。

短期養成も問題となっており、東京府立第六高女校長の丸山は昭和12年に、女学校の教育では体操の先生が一番困難な地位に居ると思われ、その理由は、「女学校を十七位で卒業して来て、其人が二年やって最も難しい体育の先生といふやうなことになるからいけないと思ふ。<sup>28)</sup>」と述べている。

体操家事科を卒業しても、始めから、あるいは途中から家事の方へ移る事も、女子体育教師が少ない原因であった。大谷は昭和13年に、「卒業した者が皆家事ばかり行って、これ迄数百人体操科の方を出て居るのですが、現に体育をやっている人は此の片

手を屈する程しかありません。(中略)体操が嫌だから家事の方へ移って行くのです。<sup>29)</sup>」と述べ、この原因について、女高師校長の下村は「体操の先生が少し骨が折れるものだから」<sup>29)</sup>と述べている。

### (3) 女子自身に責任がある一熱意・素養・常識がない、国民性から男の後ろにいる、結婚退職一

教員不足やそこから来る行進遊戯への傾倒という体制から生じるものではなく、女子自身に責任があるというものである。

藤村は、かつて全国高等女学校長会議で女学校に男子の体育教師が尊重される理由は生徒の引率や管理面のためには女子は声が低いことと永続性からとされたことに対して、昭和8年に、そうではなく、「その根本たる生徒を統御する精神、意力、威厳と共に真の体育の目的を確かに自覚して熱性を以て立って居る体育女教師が少ないと云うことが原因で、<sup>30)</sup>」と、女子の側から厳しく戒めている。さらに、「顔には白粉をつけたり長袖を着たりして遂には真の運動が出来ぬ様な状態に陥り、大した失敗もない為に首は切られない迄も校長は勿論男教師からいと嫌がられる様になるものが多い。<sup>31)</sup>」と述べるが、女子らしく装うのは国民性として無理もないこととしている。しかし、「女子の方が良いと知りながら容易に理想は破れて男子の方に勢力をとられたのは寧ろ女子に其れたけの任務上堪へる人が少ないと云ふことに帰するのと又一方に日本体育研究が実際に未だ不充分で其女子には女子の指導でなくてはならぬ事を真に語って居ない為である。<sup>32)</sup>」と、任務に堪える女子が少ないから、男子に仕事を取られてしまっていると言うのである。

男子からも、昭和11年に永田は、女子体育は女子の手になっていないのは外的、つまり、男子の社会の側に生じた事情によると推定するが、「併乍ら、果して、女子自身の側に於いて何等の消極的な原因を抱懷して居らぬものかどうかと云う点に関して一応の省察を必要とするのであろう。<sup>33)</sup>」と女子自身の側も考えねばならないとしているのである。下村も昭和12年に、「難しいデリケートな女子体育の責

任を取る女子の体操教員の修養を深め、素質を向上させるといふことはどうしても必要である<sup>34)</sup>」と述べ、佐々木は昭和13年に、「是迄の女子体育指導者の多くは非常識のものが多く、他の科の人々から軽蔑されて居るものも相当多いといふが、之れは、人にもよることではあるが、常識に乏しく、共に談ずるに足らないとして殆んど相手にされないものもあると聞く。<sup>35)</sup>」と述べたように、素質や、常識が問われている。しかし、これは、女子に限ったことではなく、男子体育教師もしばしば、同様の非難を受けている。

結婚退職によって女教師が少ないことも指摘され、永田は昭和13年に、「若し女生徒のみの学校に於ける体操科教員を女子に限定して、克く現状の有資格教員構成比に堪え得るやは疑問である。女子体操科教員は結婚に因る退職相当に多く、為に在職年数頗る短いことを思はなければならない。<sup>36)</sup>」と述べている。

女子体育指導者は男性に頼り過ぎている事も「女子体育は女子の手で」が定着しなかった理由の一つであり、昭和2年に上田は、「現在の女子体育者は余りに男性に頼り過ぎている嫌ひがないでせうか、殊に地方の女子の学校に多い様に思ひます。<sup>37)</sup>」と述べたり、安田は「常に男子の後塵をのみ弄していたならば女子本来の面目は失はれてくる。<sup>38)</sup>」と述べる。昭和6年にも、「何時までも男子の力に依頼すべきではない。世の婦女子をして体育の正道に導くも邪道に落とし入るも一に女性体育家の双肩に待たねばならぬ。敢て女性体育家の奮起を望む次第である。<sup>39)</sup>」と奮起が望まれ、昭和9年にも、大谷は、『女子の体育には女子が当たらなければならない』といふこの鉄則を生かすためには、『女子体育は吾等の手で』を勇敢に主張し得る女流体育家の出現を前提とする。然して、それには、第一女子体育指導者養成機関を拡充して、もっと教養の高い、より有能な女流体育指導者が養成されるといふことが先行しなければならない。それは、現在の女子体育指導を、男子の手から女子の手へ移すためには、一人や二人の力ではどうにもならないからである。<sup>40)</sup>」と、有能な女子体育指導者を養成しなければならないと主張している。

## まとめ

昭和旧制度期全般を通じて、「女子体育は女子の手で」が理想とされた。その理由として、1.女子は女子自身を、精神、身体、とりわけ、月経のことを理解しているから、2.ダンス、行進遊戯に限定してではなく、体操、遊戯、競技全体の動きの中で女性らしい動きは女性が教えなければならない、3.女性は女性の能力を知らない男性の動きを真似することは出来ない、4.男性教師は真剣に立派な女性を作り上げようという熱意が足りない、などが挙げられる。

この理想に対して、現実には「女子体育は女子の手で」は定着しておらず、女学校の体育教師は男子教師の方が多かった。永田の報告では、昭和12年の全国の女学校の一校平均体育教師は、1.79人で、女子体育教師は0.73人にすぎない。私立東京女子体操音楽学校の卒業生に対する調査でも、どの年においても勤務していた女学校の女子体育教師数平均で1.5人以下で全体育教師の半分程度であった。

「女子体育は女子の手で」が理想とされながら、それが定着しなかったのは様々な相互に関連し合った原因からであった。それらは、女子体育教師数の少なさから、女子体育教師は行進遊戯のみを教えなければならない状況に陥ることが多く、女子体育教師即行進遊戯（ダンス）教師の図式ができ、いつしか、行進遊戯を教えることに安住したり生きがいを感じるようになり、ダンス以外は男子に任せてそれをよしとし、女子体育全般を女子体育教師が教えなかったこと。女子体育指導者養成機関が少ない上に、家事科と合わせての養成法を取る機関の卒業生は、当初あるいは途中から家事科教師となってしまうこともあり、女子体育教師が少なかったこと。熱意、素養、常識、任務に堪える力のない女子体育教師もあったり、国民性や伝統から結婚退職したり、男子に頼り過ぎて女子体育教師自らが前に出て「女子体育は女子の手で」を主張する者が少なかったことなどである。

したがって、昭和旧制度期において国側の女子体育指導者養成の立ち後れ、そこから生じた女子体育教師はダンスに傾倒せざるを得なかったこと、女子

体育教師自身にも伝統的女性観に甘んじ、男子に頼ってしまった責任もあり、「行進遊戯（ダンス）は女子の手で」が定着してしまい、「女子体育は女子の手で」は理想とされながら定着しなかったといえる。

## （注）

- 1) 掛水通子,『『女子体育は女子指導者の手で』の出現をめぐる一考察—大正初期まで—』, 東京女子体育大学紀要, 第20号, 1985年. pp.1-10.
- 2) 敗戦後, 新教育制度が発足する以前
- 3) 私立東京女子体操音楽学校の卒業生に対して郵送の質問紙により平成5(1993)年11月に実施した。高齢等で回答を得られない場合もあり, ここでは137人の回答を考察の対象とする。
- 4) 「体育運動審議会概況」, 體育と競技, 9巻8号, 1930年, pp.103-6. 本研究では固有名詞は「體」のようにそのまま表記した。
- 5) 上田精一, 「若き女子体育指導者諸嬢よ」, 健康の女性, 4巻10号, 1927年. p.26.
- 6) 古屋末松, 「女子体育指導の体験より」, 體育と競技, 8巻11号, 1929年.p.95.
- 7) とほる生, 「女性体育家の奮起を望む」, 女性體育, 1巻6号, 1931年. p.1.
- 8) 浅井浅一, 「体験より女子体育へ」, 體育と競技, 14巻9号, 1935年. p.34.
- 9) 伊澤エイ, 「女子体育家に望む」, 體育と競技, 13巻6号, 1934年. p.1.
- 10) 上田精一, 前掲書5), p.27.
- 11) 大谷武一, 「『女流体育家の蹶起』を要望す」, 體育と競技, 13巻1号, 1934年. p.5.
- 12) 藤村トヨ, 「女子の器械体操教授は女教師に限る」, 女性體育, 2巻4号, 1932年. p.1.
- 13) 藤村トヨ, 「何故女学校に女子の体育教師が良いか」, 女性體育, 3巻8号, 1933年. p.3.
- 14) 浅川正一, 「女子競技の諸問題(一)」, 體育と競技, 15巻11号, 1936年. p.12.
- 15) 「座談会 今後の学校体育を語る(一)——主として指導態度の問題について——」, 體育と競技, 18巻5号, 1939年.

- p.36.
- 16) 永田進, 「師範学校中学校高等女学校体操科教授担当教員の資格に関する考察(一)(中等諸学校体操科教員調査 第一報)」, 體育研究, 5巻5号, 1938年. pp.58 - 105. および同第二報, 同5巻6号, 同年. pp.71 - 11 7. 同第三報, 同6巻1号, 1939年. pp.19 - 86.
  - 17) 伊澤エイ, 「一九三四年体育ダンス」, 體育と競技, 13巻12号, 1934年. p.98.
  - 18) 大谷武一, 前掲書11), p.4.
  - 19) 大谷武一, 前掲書11), p.5.
  - 20) 大谷武一, 「指導上注意すべき諸点」, 體育と競技, 17巻10号, 1938年. p.19.
  - 21) 大谷武一, 前掲書20), p.18.
  - 22) 今井熊太郎, 「女子体育の諸問題」, 體育と競技, 17巻1号, 1938年. p.10.
  - 23) 吉田清, 「軌道に乗った行進遊戯」, 女子と子供の體育, 2巻3号, 1937年. pp.16 - 19.
  - 24) 渡邊江津, 「本試験雑感」, 女子と子供の體育, 4巻10号, 1939年. p.48.
  - 25) 掛水通子, 「昭和期旧制度における中等学校体操科(体錬科)教員免許状女子取得者について」, 東京女子体育大学紀要, 第22号, 1987年. pp.1 - 10. 参照
  - 26) 「偶感二題」, 體育と競技, 7巻4号, 1928年. p.2.
  - 27) 吉田清, 「女性体育への提唱」, 女性體育, 1巻1号, 1931年. p.31.
  - 28) 「『女子体育を繞る諸問題』の座談会(二)」, 女子と子供の體育, 2巻2号, 1937年. p.22.
  - 29) 「『時局と体育』を語る座談会(一)」, 女子と子供の體育, 3巻1号, 1937年. p.33.
  - 30) 藤村トヨ, 「何故女学校に男子の体育教師が尊重されるか」, 女性體育, 3巻7号, 1933年. p.5.
  - 31) 藤村トヨ, 前掲書30), p.6.
  - 32) 藤村トヨ, 前掲書13), p.2.
  - 33) 永田進, 「女子体育と女子教員(一)」, 女子と子供の體育, 1巻4号, 1936年. p.33.
  - 34) 「『女子の特性と女子体育』を語る座談会」, 女子と子供の體育, 2巻7号, 1937年. p.54.
  - 35) 佐々木等, 「女子体育指導者教育の方針(一)」, 女子と子供の體育, 3巻3号, 1938年. p.12.
  - 36) 永田進, 「師範学校中学校高等女学校体操科教授担当教員の資格に関する考察(一)(中等諸学校体操科教員調査 第一報)」, 體育研究, 5巻5号, 1938年. p.87.
  - 37) 上田精一, 前掲書5), p.27.
  - 38) 安田広嗣, 「女子体育者の為に」, 健康の女性, 4巻10号, 1927年. p.9.
  - 39) とほる生, 前掲書7), p.1.
  - 40) 大谷武一, 前掲書11), pp.5 - 6.